

# 対話するパレスチナ ——芸術が創出する公共圏——

佐々木陽子

## 要 旨

芸術が鑑賞される時、一種の他者が立ち現れる場すなわち「公共圏」の形成をもたらす。そのことで、作者と鑑賞者との間に、芸術作品との対面が感情的な動きや内的対話、あるいは他の参加者との対話等を生み出す。鑑賞者は、芸術作品が生み出された社会背景、作品に描かれる意味の解説などから、親密圏外の情報とそこに息づく他者を見出す。これにより鑑賞者と作品の間に、情動的交流だけではなく、さらには共感的・感情的な交流もがなすとげられ、これは一つの確実な対話の場面と考えることができる。筆者は芸術作品を一つの異文化接触の場として注目し、それを遠隔授業での他者理解を深めるツールとして利用した。この論文では、見えにくい「他者」を顕在化し、一つに収められない多声として可視化し、さらにその「対話」を形成する場として芸術作品を用いた遠隔授業に関して、その理論概要を分析する。

キーワード：パレスチナ、芸術、公共圏、ポストコロニアル、対話

## 1. はじめに

2020年に突如世界を襲ったパンデミックは、この世界に生きる私たちから「他者」との出会いに関する機会に大きな制約をもたらした。この時期、大学は急遽遠隔授業を準備し、教員は教育素材の準備に奔走した。遠隔授業とは、通常授業をそのままオンライン化することではなく、かなりの素材やツールの再編成を要するからだ。

筆者が取り組んできた異文化間対話や異文化理解にかかわる教育においても、遠隔化は不可避の事態であるが、実はこの領域における遠隔化環境の構築という課題は、コロナ・パンデミックのはるか前から自覚され指摘され、広域にわたり教育的な努力が支払われてきた分野でもある。異文化間問題の理解のために、現場で学ぶ以外の様々な擬似的な方法で教育が行われる必要があり、シミュレーション・ゲーミングやドラマなど、手法の開発と応用がなされてきた。

本稿で議論するのはとくに、遠隔授業における他者理解へのアプローチの在り方、他者との対話環境の設定状況の形成に関する公共圏の重要性についてである。鑑賞者と表現者

のコミュニケーションを形成し、情報伝達のみならず、感情の喚起、関係性の構築にさえ有効な芸術作品は、遠隔を余儀なくされる現状であるからこそ、もっと注目されてよい分野だと思われる。今回行った教育事例についてその概要・大枠の背後にある理念や他者理解について分析することで、遠隔環境における芸術作品の意義についての議論を深めたい。

## 2. 他者を他者たらしめるための場＝公共圏の形成

政治哲学者アーレントは、古代ギリシャのポリスにおいて、市民が対等な資格で政治や哲学について語り合ったことを「公的領域」と呼んだ。図書館情報学用語辞典第4版において、公共圏は「政治・経済権力から独立し、誰もが参加できて自律・合理的な議論が可能な、世論形成のためのコミュニケーション空間」と定義されている。18、19世紀のイギリスのコーヒーハウス、フランスのサロンなどがその例とされ、新聞などの出版メディアにより政治的公共圏が発達するが、その後、放送メディアの発達によりマスメディアの機能に変質し、近代的な公共圏の衰退が指摘されている。同時に、新たな公共圏としてインターネットへの関心が高まっている。

アーレントのいう「公共性」を理解するためには、アーレントが戦禍を逃れたユダヤ人マイノリティとしてアメリカで生き延びる中、マイノリティがリアルに関わりを持って立ち現れることのできる場の重要性を痛感していたことをふまえる必要がある。存在を許されず、存在を隠すことでしか生き延びられなかったアンネの日記にあるような存在は、隠れた生の無意味さを知っている。政治的な「排斥・抹消」の経験をふまえているからこそ、社会の中で「他者」としてたち現れることができるかどうかという点に大きな意味を認めたと考えられる。アーレントは代表的著作『人間の条件』のなかで、「公的領域」(public realm)を次の二つによって説明している。

1 第一の「公的」次元は「現れの空間 (space of appearance)」で、自分とは異なる他者と経験を共有することで開かれるリアリティの場である。

直接他者と向き合って話をしたり、何かのイベントを共有することが人間生活のリアリティを形成しており、それは食う・寝るというヒトの動物的行動(=労働)や、孤独の中で何かを作ること(=仕事、制作)や、考え事(=思考)とはまったく違うのだ、と主張した。この「現れの空間」は永続的なものではなく、対峙したり、集まって言葉を交わす一時的なものだとも言っている。

2 第二の「公的」次元は「世界」(world)あるいは「共通世界」(common world)、一時的な集合を越えて、より広い空間・時間において人々に共有されるものである。過去から伝わり未来に続く人間の歴史や文明に匹敵するものがアーレントの中で《公共性》として位置づけられている。

他者が他者のまま立ち現れる瞬間的な場が、隣接する時間領域と空間領域へと広がることが、存在の表現を奪われ、あたかも生を自ら隠蔽するような存在の仕方しか許されなかったマイノリティが重視した「場」だといえる。

## 2-1. ハーバマス後の拡大

以上の公共性に関する議論をふまえて、ドイツの社会哲学者ユルゲン・ハーバマスは、『公共性の構造転換』にて、近代の市民や貴族がコーヒーハウスやサロンや読書会において対等に議論し合ったことを「公共圏」と呼んだ。

遠藤（2017）によれば、公共性、公共圏という概念、制度は70年代の関心の高まりをへて、80年代に入ると政治学人文社会学のほとんどの分野で公共性、公共圏の概念が議論されるようになる。さらに1989年の冷戦終焉と同時に上述のハーバマスの著作『公共性の構造転換』の英語訳が出版されると、91年には書評で激賞されたこともあり、一気に公共圏の研究が加速された。

日本では、受動的市民から能動的市民への変換という文脈で、安保や公害の議論と共に1960年代から公共圏への関心が高まっていたため、公共性や公共圏という概念は、少なくとも教育ある人々の間にはある程度普及している。実社会に並行し学術でも議論が深まり、公共、公共圏を冠した著作も多数著されてきた。また韓国の政治哲学者が日本の大学の公共性研究シリーズに加わったことなどは、東洋の公共研究への関心を示すものといえる。

フェミニズムと公共圏・親密圏の問題や、宗教と公共圏の関係など、拡がりと同時に限界についても議論が行われているが、それら「ポスト公共圏」の議論が、既存の公共圏概念のうえにあるのは言うまでもない。

もともとのハーバマスの定義によれば、公共圏とは「小さいが、批判的に討議を行う場」と考えられている。「意見を異にする多くの者から構成される集団が、よりよく生きる場を築くのに選択しなければならない問題を確認し合い語り合う政治空間」と言い換えられることもできる。その政治空間にできるだけ多くの人に参加でき、互いに等しい条件下で、合理的に意見を主張し合える「場」のことを指し、「公開性」「平等性」「合理性」の諸原理で示されることが多い。

しかしながら定義についての厳密性をそもそもハーバマスは必要としておらず、個別の事象による多義性や、通時的比較の無意味さも指摘されている。「階級」や「ジェンダー」などと似て、細かな定義よりも、現実にかかる現象を解明するうえで役立つ道具的な概念だとの指摘もある（桶川2011）。

親密圏が愛によって他者を包み込む場とされる一方、公共圏が議論による合意形成の場であるという性質の違いがあるものの、それらの性質は可変的であり、親密圏が発展して

公共圏に立ち現れることで、社会のあり方を問い直す「対抗的な公共圏」にもなっていくことがあると考えられている。

## 2-2. 政治的な「他者」が立ち現れることの意義—親密圏との比較から

ハーバマスは、近代の市民や貴族がコーヒーハウスやサロンや読書会において対等に議論し合うさまを、「公共圏」と呼んだ。齋藤純一（2008）は政治の条件を、各人が政治的空間、公共空間において、ひとしく「眼差しを向けられ」て立ち現れ、政治的人格を与えられた「全うな他者」として認識されることだと述べている。

アーレントは、政治空間において我々がきちんと「現れ」となるためには、what「何」ではなくwho「誰」として「眼差しを向けられる」必要があると述べている。実際はそこにいるのにあたかも他者がそこにはいないかのような全体主義的な状態を脱するには、他者の「現れ」が重要なのだ。「声なき声を聞く」とか「存在の可視化」はこうした文脈で重視されていると考えられる。

概念的には、万人が平等に政治的人格を獲得し、自らの言葉で語り、声を聞き取られる場所が公共圏である。しかしながら公共圏で自らの声をまだ持たず、あるいは持つための安全性を失い、政治的人格として扱われないまま多数派に付随した生を強いられる存在がいる。彼らの自尊心は政治的人格とともに失われ、公共空間から退出させられるか、多数派の目線と解釈に翻弄されるか、しかない。そうした状態に対抗して、人々は、他者としてではなく生としての存在そのものを承認される場を欲する。それが「親密圏」とされる領域である。当初は近代家族の領域とされた親密圏は、親しさと愛情を基盤とした「仲間」の領域を指すものとして拡大し、近年は「生の拠り所」として、公共圏の対抗領域、あるいは並立的公共圏、自由領域という意味合いも付与されている。

親密圏が同一価値観によって形成される身内の寄り集まりの場であるのに対し、「公共圏」には「他者」が存在するうえ、その他者が政治性を持って立ち現れることが、公共圏の最大の特徴である。同質だから生きていてもいいのではなく、異なる価値観が表現されることによって、埋没しない「他者であること」が可視化されていく場であり、交差し合い、主張を闘わせあい、創造が生まれる場が、公共圏である。同質ではなくても異質な人々の存在が承認され居場所を分け合うという発想に支えられる討議の場は、同時に、理性的な熟議をし得る政治主体であることを保証する。

## 2-3. 包括的な公共圏と、声を奪われた社会階層の可視化「祝祭」

以上の公共圏に関する議論を踏まえ、社会における対話の階層性を重視するジョン・L・ブルック（2004）は「包括的な公共圏」を次のようにレベル分析している。

レベル1 理性的な合理主義が支配する公式の政治空間（議会や裁判所）と、合法的市

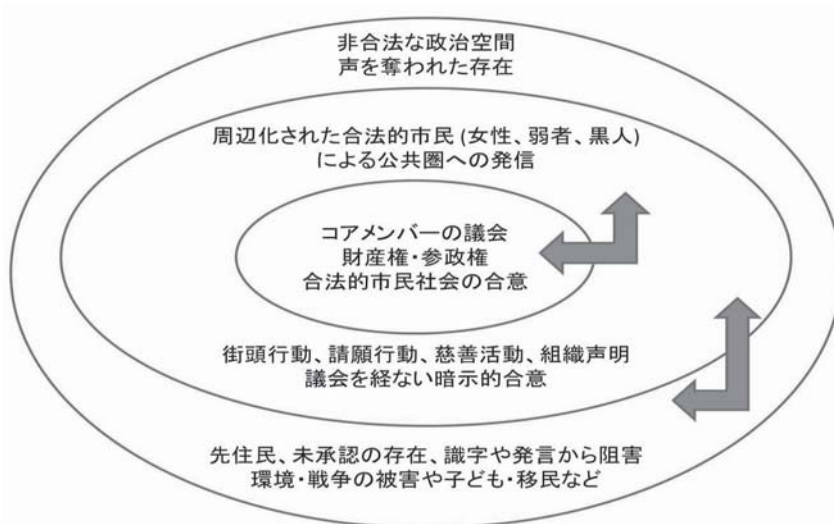
## 民社会のコアメンバー

レベル2 参政権や財産権を持たないか権利の制限を受けている（女性や未成年者、移民などの）合法的市民社会。デモや請願などの手段により公共圏に自らの政治性を立ち現すことができる。

レベル3 非合法的な未承認な社会空間。暴動や反乱、一揆など合法ではない手段を含め、政治的要請を表現することができる。

以上を図式化したのが図1である（筆者作成）

図1 包括的な公共圏と対話



違うことを前提とする他者が立ち現れる多元社会を重視し、公共圏に他者が立ち現れる現象を、石田（1998）は「祝祭」と表現している。日常をゆるがす祭りの日、ハレの場に、日常にはない「異なるもの」が立ち現れるのと同様、アーレントには他者の可視化は「異常なもの」と映ったのではないかと石田は説明する。次節では対話論をもとに、一種の「祝祭」に相当する場を教育場面で形成するという発想を深めることとする。

先住市民が未承認の存在となり、識字や発言から除外されているという現状が起きているパレスチナでは、現地の生き生きとした声を聞き取ることは、決して容易ではない。移民や難民など、実際に越境を果たす人々が社会的に顕在化する日本社会でもまた、越境に伴う様々な社会的な知を共有する需要が高まっている。しかし実質的な越境経験の少ない人々にとっては「越境」を理解するための補助的ツールが必要である。そこで次節では多様な声を聞き取るということについて対話論を基礎に考えてみたい。



### 3. 公共圏としての多声—バフチンの対話論をもとに

#### 3-1. バフチンの対話と多声（ポリフォニー）

ミハイル・バフチンはマルティン・ブーバーと並んで対話の哲学者とされるが、同時に、対話原理を、文学、言語学、心理学、文化論など多彩な領域に応用したことで知られており、これがバフチンが学際的な注目を集めるゆえんとなっている。「異質な他者と向き合うことの困難さ」という現代社会が抱える課題に対し、「対話」を多声/ポリフォニー概念から分析したバフチンは、新たな解を示した。

多声/ポリフォニーとは本来、多声音楽やその作曲様式を意味する音楽用語であった。これをロシアの文芸学者ミハイル・バフチンは、融合せずに自立した複数の声や意識が織りなす対話的關係によって高度な統一を実現していく構造を、文学研究の中で用い、それによって分析した『ドストエフスキーの詩学の諸問題』後、ポリフォニーという概念は、さまざまな文化分析の領域で応用されるに至っている。

「私と他者が、同じ空間・時間を共有することは決してあり得ないのだから、そこから引き出される世界の解釈も一致することはあり得ない。したがって、私が私の内部で考えていることは、私以外の他者には決して規定できない」という、一見すると絶望的なわかりあえなさを前提に対話を考察したバフチンは、自己意識が他者に規定されきれない未完結な部分を持つ存在であることをむしろ高く評価していたと言われる。その異質性こそが、創造性の鍵となり、「ともに声を出すこと＝協働」と「さまざまな声が同時に存在すること＝対立」の両面が成り立つ状態を作り出すと考えたからだ。

#### 3-2. 「ともに」「様々な」声を出す

ポリフォニーという対話モデルは精緻化されていき、発話者がそれぞれの立場からの声を引用し、自由な意味づけを行うことを許す「ポリフォニー」は、「モノローグ」（独自の再解釈を許さず話者の発した声を一つの固定的な正解として解釈し暗唱したり復唱したりすることを要求する形）との比較がなされた。話者間の自由で対等なダイアログであるポリフォニーが、独立した意識を持つ話者の間で対等に行われ、相互に新たな意味を見出すための契機になると考えられ、評価されていった。それと同時に、後者のモノローグは新たな意味の創成をはばむ権威主義的なものとして批判された。

バフチンには『ドストエフスキーの創作の諸問題』（1929）と、その改訂増補版『ドストエフスキーの詩学の諸問題』（1963）という2つのドストエフスキー論があるが、この「ポリフォニー」を示す記述として桑野は次に注目する。

*対話のもっとも重要なカテゴリーとしての一致(согласие)。……不一致(н*

*е согласие*) は貧しく、生産的でない。もっと本質的なのは *разногласие* (さまざまな声があること) である。実際、それは一致へと向かっているが、そこには声の多様性と非融合性がつねに保たれている。

バフチン研究の日本における第一人者である桑野はこれを分析し、「ともに、さまざまな、声を出すこと」にバフチン対話論の重要性があると指摘し、バフチンの対話原理は「距離を確保した対話的能動性」に要点があると分析している（桑野2008）。

以上の分析のうえで、こうして本研究では、「距離」を、あってはならないものではなく、むしろ対話の重要な要件と考える発想を重視するバフチンの対話論を基礎にした。その上で、遠隔的な環境を強いられる我々にとって、逆説的に意味のあるギャップを意識し重視し、それゆえに他者との対話を意識的に構成する教育設定を行うことが重要ではないかと考えた。とりわけバフチンの言う「ともに さまざまな声」が発せられ、「それぞれが統一のためではない形」（ポリフォニー論）で示されることが、アーレントの「他者として立ち現れる個」の役割を果たすと考え、それを重視することとした。

## 4. 異文化接触のツールとしての芸術への着目

### 4-1. シミュレーション・ゲーミングおよび異文化体験ゲームの実験的試行性

仮想環境が求められる学習場面として、もっとも初期に開発が行われた教育工学は、SG（シミュレーション・ゲーミング）に関するものである。初期には軍事と、実務家教育において重視されたと言われている。第二次大戦における日本の軍事作戦は、文部科学省内で行われた有名なシミュレーション・ゲーミング「演練1941」によってその推移があらかた未来予測されていたし、看護や医学、また模型での練習が推奨される手術や理容など、実務が重視される職業訓練分野で主に用いられた。その後、現在までに、経営、株式投資、保健衛生などといった相互作用や動きの伴う分野に応用が広がり「ツールとしての」シミュレーション・ゲーミングが重視されてきた。これを背景に、異文化理解の分野でも多くの代表的なSGが開発され、今では国際理解教育、サステイナブル教育等の分野でも広く使われるようになっていく。

教育ツールの開発を初期にけん引したのが、グローバル・イシューへの理解におけるSGの利用・応用という目的であった。一人一人の把握できるリアリティの領域は限定されており、時系列のおよび地理的なマクロの広範囲な実態を把握するためには、一種の箱庭的なミクロの装置への置換が効果的であった。シカゴ大学で環境問題の理解のために開発されたSIMSOCや、ヨーロッパの漁場資源の保全のために漁民の理解を深めるために開発されたとされるFISH BANKなどは、その一例である。

SIMSOCはその応用編も開発され大学教育を含めて幅広い世代を対象に、開発時から現在に至るまで、地球規模の環境問題（汚染対策や、環境対策の試行の基礎学習）を扱う重要なツールとして高い評価を受けている。例えば名古屋大学文学部で広瀬が開発したSIMINSOCは、日本の大学で幅広く用いられており、JASAG（日本シミュレーション・ゲーミング学会）の2020年秋の大会でも遠隔環境でのSIMSOC応用版を含め多数のオンラインSG報告がなされている。星野命・金沢吉展ら（1998）は、米軍が開発した異文化適応SGバファバファを紹介したうえで、シミュレーション・ゲーミングは異文化適応学習への効果が高く、留学生教育へも有効であると述べている。

時間と空間の差し替えを可能にするSGは、情報面及び感情面での多様性をもたらし、資源等の有限性における協同、競争行動の新たな意味づけの喚起など、政治行動が強く導かれるべきテーマに関して、各種の研究領域における実験的ツールとしても用いられることが多い。さらに共同協力や交渉といった応答のSGとして、模擬裁判や模擬国連、投資・経営や紛争解決などといった多面的な応答、人間のコミュニケーションそのものを扱う複雑系領域での応用も行われている。

広範囲な問題を扱うという地理的移動にくわえて、未来や過去といった時系列的な移動をも可能にするツールがSGである。過去から学ぶしかなかった学問に対し、未来を予測し、その予測に基づいて現在をさかのぼって決定するツールを提供したSGというツールは時系列的な実験性、再演性という自由を学問に与えたと言える。この特性によって、まだ解の出ていない課題に対し多角的かつ協同的な視点が必要とする発見型課題解決において、シミュレーション・ゲーミングはとりわけ効果を発揮すると考えられている。

しかしながら、SGと紛争社会の創造性の関連については、パレスチナを日本の参加者でシミュレーションする場合と、現地で参加者を募る場合とでは、共有される前提条件に大きな隔たりがある。SGの場合は、資本主義や環境問題、紛争における重要な課題が何かなど、前提となる知識や条件がある程度共有されていてこそ、時系列的な試験的要素から得られるものが明確になる。ところが一般的な日本人にとって、そもそも軍事紛争やそのもととなったコロニアリズム的な領土問題、分断された民族性や宗教性について、現地との共通認識がほぼ存在しないと言っても過言ではない。この大きすぎるギャップがあることによって、現地の状況を再現するシミュレーションをたとえ行ったところで、それが必ずしも現地の正確な理解には直結しないことも予測される。動態を理解する前の状況に関する知識の獲得を優先する必要があるだろう。

#### 4-2. 紛争の多面性と動態性

紛争に関する解釈は、立場によって大きく分かれる性質がある。それゆえ、紛争に関する対話や異文化接触を形成するためには、一つの排他的解釈や絶対的な声によるモノロー



グ的な手法による偏りや解説は、倫理的にも学術的にも容認されないだろう。とりわけ現時点で紛争状態にある国家や異文化に関する接触状況を理解しようとする場合、受講生はいずれの土地やアイデンティティの接近やシンパシーを持っている可能性がありえるうえ、政治的自由度はいかようにも認められるべきである。したがって動態としての紛争を伝える場合、情報のみを依拠した形式は容認しにくい。

この大前提を踏まえたうえで、紛争にかかわる多様な声の提示は、どのような方法でもたらされるべきだろうかという点が問題となる。とくに大学における教育活動として、教育者はどのような形で公共圏を形成し、そこに自由な声を可視化し、また一定の対話的議論を形成することができるだろうか。さらにこの教育的課題は、コロナが制約を加える社会情勢にあっては、極めて限定された手法で達成されねばならない。端的に言えば、現地フィールドワークや、直接的な対話は設計できない。これはそもそも紛争地の両者にとって困難な課題ではあるが、それぞれの地域（便宜的にイスラエル側とパレスチナ側と分類するとしても）の内部の多様性も相当な範囲にわたり、宗教的、経済的、地理的、政治的に大きな幅が存在する。また、情報がマスメディアを介するしかない現状にあって、外部の学習者と現地の間にも情動的感情的な乖離が激しい。このような状態で、人と人が出会い、対話的な関係を築く手段として筆者が注目したのが芸術作品である。

#### 4-3. パレスチナ芸術の特徴

パレスチナにおける芸術表現は、1948年に多数の難民とくに知識人が国外に脱出した際に一度は途絶されたとされ（カナファーニー 1974）、そののち様々な方法で占領下の芸術が形成されはじめ、難民と化した在外パレスチナ人の芸術と同時にそれらの顕在化が世界との対話を生み出したことにより、現在までに一つの重要な文化的抵抗として、パレスチナ芸術が認識されるに至っている。筆者らはこれを第三次インテリゲンチヤと捉え分析してきた（佐々木 2020）。

パレスチナ地域芸術の評価は、商業的成功を問われる分野ではなく人道的な理解や共感の場面で徐々に高まっているものの、国際的な認知はごく一部にとどまっている。パレスチナ外部においては、抵抗と言えば「石の抵抗」に代表されるような軍事的あるいは集合的な力の行使に着目が集まるばかりで、現地にある重要な芸術活動の展開によって、人々が精神的に表現しあい励ましや紐帯を形成していることが「文化的抵抗」と呼ばれ、共感を集めつつあることについて、十分に認識されているとは言えない。

また民衆芸術としての側面の強いパレスチナ芸術は、とりわけポストコロニアリズムの文脈にあって、一種の対抗的公共圏を形成することが期待されるものである。しかし、もし対話的な交叉性がなされなければ、それはあくまで対抗的公共圏を形成しないまま、親密圏の形成にとどまることになるだろう。

物理的・時間的越境を仮想的に可能にする民衆芸術が、聞き取りにくい現地の声を可視化し、公共圏を形成する契機を形作ることが期待される。同時に、その政治性ゆえに、芸術の政治性を危険視し、親密圏におしとどめようとする力も同時に働いている。公共空間にこそ芸術に媒介された多声の展示や可視化が必要だと評価する声があることは、例えば日本国内でも、あいちトリエンナーレ問題その他でたびたび顕在化してきた。パレスチナ・イスラエル間の文化芸術でも、パレスチナの作品が評価されると、同時に両論併記等の義務を課す動きが起き、例えば映画祭の受賞やノミネートについて両論性が主張され、それによって受賞の可能性が潰えた作品さえある。

国際政治に翻弄される中であっては、民衆芸術が公共圏を形成するための道程は容易ではない。パレスチナ芸術はひとつの親密圏として成長著しい分野ではあるが、公共圏の形成において支援を要する段階にあると考えることができるだろう。遠隔授業の今だからこそ、芸術作品を媒介として他者との出会いの場を設定することができれば、それは十分に一つの公共圏の形成の契機となるのではなかろうか。

#### 4-4. 公共圏の契機としてのパレスチナ芸術の可能性

以上のような分析を経たうえで、本研究では、パレスチナ芸術作品を、それが生まれた社会背景とともに紹介し、その鑑賞の機会提供を行うことが、パレスチナの「声」を可視化する、一つの重要な手段であると考えて教育環境を整えることとした。その声の場を対話的に設定することによって、聞き手もまた能動的な対話性を確保し、安全な「他者との出会い」の場を提供することになるだろう。

芸術鑑賞の場は、ただ単に、他者が一つの閉鎖された親密圏を公開し、対抗的公共圏を形成するという意味合いにとどまらず、我々の生活全般におけるアートの再発見をうながし、表現権としての芸術を契機に、創造的な観点から社会をとらえなおすことにもつながると考えられる。

こうして筆者は「異文化との接触」科目における「副題 対話するパレスチナ」講座において、芸術作品の紹介を基軸に据えて展開することとした。民衆芸術を含む多彩な芸術作品によって現れる暮らしや人々の素顔を、一種の「多様な声」すなわちバフチンの言う多声として可視化することにより、一つの公共圏を仮想的に立ち上がらせることができるのではないかと考えたからである。副テーマの「対話するパレスチナ」は、補強する学術的枠組みとして、バフチンの対話論の紹介を初回および講義資料で提示したうえで、現地の様々な芸術を対話論として扱う枠組みとした。

この「対話のための多声としての芸術」という位置づけは、日本で行われるアートと地域づくりの構造にも類似する。芸術を通して表現される現地の実情や生の声、人々の多角的な声と素顔、その多様性が鑑賞者に伝わり、それとの内的対話が形成されることを期待

したのだ。次節では、具体的な教育の枠組みとともに芸術テーマがどのように提示されたかについて述べたいと思う。紙幅の関係で詳細な分析は次稿で行うこととする。

## 5. 公共圏を形成する教育環境の設営

### 5-1. オンライン授業の環境

質の高いオンライン授業を実施するためには、ハード面の環境に加えて、ソフト面の充実と支援が重要である。本学では、以前よりWeb Classという授業支援システムを導入しており、これに加えてZOOMを用いた遠隔授業が行われた。

WebClass（ウェブクラス）は、日本の大学向けに開発された国産のLMS（ラーニング・マネジメント・システム）で、「大学教育に必要な教材やテストの作成、レポート提出や成績データの集計がシンプルに行え、教員、学生、管理者すべての利用ニーズに応える」ことができるツールであるとされている。システム紹介サイトには、「アクティブラーニングを実現、類似レポート検知機能、進化した教材作成機能、学内システムとの連携、eポートフォリオの基盤として」の5項目が記されており、実際にこのシステムのおかげで、対話的な環境による学習の進捗が大きく助けられた。

特に筆者が用いたのは、学生フィードバックとしてのアンケート機能と、課題提出システムである。画面上でクイズ設問や提出窓口を設置できるうえ、選択肢から学生がマークを押す形で簡単に回答ができると同時に、教員が示されたものをもとにデジタルのまま画面上にコメントを返すこともできる。紙媒体であれば回収の機会や窓口が制限されるが、デジタル媒体であることがこの場合は教員と学生の双方向性を強める結果となっている。またアンケート機能を用いることで、必要に応じて広い意見収集が可能になった。資料提供には学内が設置した「講義資料」のサイトも活用した。

こうして資料や双方向性のある意見交換の場を用いたうえで、講義および写真や映像の資料提示は主にZOOMを用いた。ZOOMの資料共有システムは、より簡便に学生の手元に映像画像の資料を届ける方法となった。アンケートでも、多数の写真提示を高く評価する声が多く、一種の現地ツアーの様相を得る効果もあったと考えられる。

### 5-2. カリキュラム上の位置づけにみる「多様性と他者」

本論で扱う「異文化との接触—対話するパレスチナ」のカリキュラム上の位置づけを確認しておく。

南山大学における「共通教育科目」は、「専門領域にとらわれない幅広い学問知識を身につけるための科目」とされていて、単位取得目的（ディプロマ・ポリシー）との呼応は、NU1「人種、障がい、宗教、文化、性別など様々な違いを認識し、受容するための基礎と

なる教養」および、NU2「多様性を前提とした人間の尊厳、他者の尊厳を尊重する力」の獲得、「グローバルな視点から多面的に物事をとらえることができる」ことが学習・教育到達目標とされている（理工学部カリキュラムツリーでの位置づけを参考に）。

この「共通教育」の下部構造として、「学際科目」（選択必修）があり、その分野のひとつである「思想と文化・芸術」に「異文化との接触」があり、本稿で論じる「6 対話するパレスチナ」が提供されている。主にパレスチナ地域の異文化接触状況を、思想、文化、芸術の面から分析する講座であるが、中東社会やアラビア語など別の単位との関連は形成されておらず、言語や文化、平和学や国際関係など、関連学習について特段の前提条件も課せられていない。そのため基礎知識の裏打ちは必ずしもあるわけではないが、個別の強い関心や他の領域との学際的着目は十分にあり、選択的に当該の国際課題を主体的に理解したい学生が受講するという、受講動機に恵まれた状況で提供されている。JABEEの学習・教育目標A-3として「複数の観点から社会、文化、価値観等に多様性があること」を学習目標にすえており、イスラエル-パレスチナ問題を扱う芸術作品を複眼的に理解するという教育設計は、非常に合致したものになる。

## 6. 公共圏を形成する多声としての芸術

### 6-2. 授業で紹介した芸術分野概観

紙幅の関係上、本論では、芸術作品の詳細リストとその回ごとのアンケート調査結果の分析を行わないが、当該の授業で紹介した芸術分野と作品や資料の分類は次の通りである。

#### A 占領と国境に関する作品群

コースのはじめに、OCHA（国連人道問題調整事務所）、UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）の地図資料、写真作品を主に提示し、現地の概要を大まかに把握できるようにした。とくにパレスチナの静かな農村風景、巨大な入植地の写真からは、土地の接収のみならず水や電力といったインフラの格差を目の当たりにし、高校までの歴史や地理の教育の中である程度の知識はあったと自負する学生たちも、ほかで見られない資料として高く評価していた。

国境と国籍の問題を知る作品として映画『シリアの花嫁』の紹介を提示し、同時にドゥルーズに関する資料を講義資料に掲載した。関連する映画は多く、イスラエル建国に関するBBCの映像資料を基礎情報として視聴共有したが、映像資料の多くは授業時間内でフルに視聴する時間枠が確保できず、各週の土曜日午後18時に時間を設定し、その週の学習事項に関連する映画作品の自主鑑賞会を開き、自主参加者を得た。



図2 パレスチナ・ベツレヘム近郊に建設されたイスラエル入植地 HarHomaの昼夜写真  
(佐々木陽子撮影)



## B 地域演劇

「ライト・ライブリフッド・アワード」を受賞したアルナ・カーミスの業績をドキュメンタリー・フィルム『アルナの子どもたち』の部分的鑑賞で概観し、ジェニン自由劇場を中心に、演劇の地域や個人に与える影響や意義を解説した。演劇という仮想空間が、紛争状態の中では逆説的に自由を確保する場だったことについて理解が深められた。フィルムの舞台となった難民キャンプ全般の情報屋、UNRWAの役割、紛争支援における教育の意義に関する資料が同時に共有された。

## C 音楽と共生社会

ダニエル・バレンボイムとエドワード・サイドが共同で行ったウェスト＝イースタン・ディヴァン管弦楽団について紹介し、ドキュメンタリー・フィルムや著作に収められた発言や音楽合宿における対話の様子を鑑賞しながら、現地の若者の対話や本音をドキュメンタリー作品から聞き取っていった。軍人さえもが観客席で涙を流したとされる「ラマラ・コンサート」の紹介、現場で別れがたい思いを抱き軍のジープで別れ別れになるイスラエルの団員とパレスチナの人々の姿は、報道ではもたらされにくい新たな人々の像を結ぶこととなった。また日本の新聞でたびたび紹介されているバレンボイムの訪問やメッセージについても紙面の意味を改めて読み取った。

## D ストリート・アート、壁画

バンクシー（英国を拠点とする匿名のアーティスト・路上芸術家）がパレスチナを訪問した2006年の作品をはじめ、ベツレヘム近郊の壁画に描かれたストリート作品を中心に、分離壁の紹介を行うと同時に、「国家の安全保障」と対比して「人間の安全保障」概念が



形成された経緯と比較しながら、民衆芸術やアール・ブリュット芸術の意義を説明した。同時に分離壁の意味についても考察を深め、植民地主義が単に占有や占領支配だけではなく、現地住民の労働力や水資源や農業資源といった資源接収という経済的動機に裏付けられていることをデータから理解し、分離壁が単に分断としてだけではなく、選択的に労働者をより分け吸い込む機能を果たしていることを理解した。

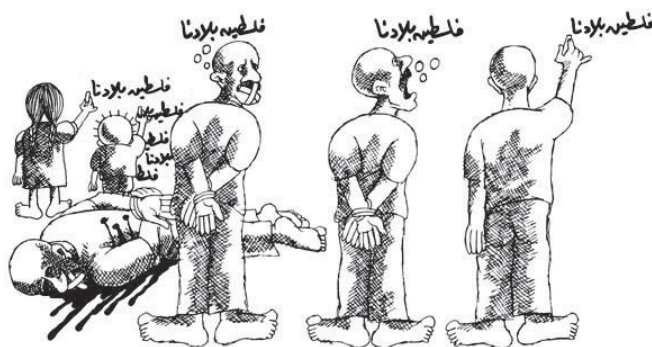
## E 児童画、風刺画、漫画

子どもの描いた社会画（樹木画や、学校画など、テーマを定めて描かせた絵画を分析ツールとする方法による心理分析・対話分析）を用いた現地調査の結果、ユニセフの資料をもとに、軍事占領の意味を子どもの目線で浮き彫りにした。

続いて世界的に有名になった風刺絵画作家であるナジ・アル・アリ（Naji Al-Ali）の作品集の解説を行った。主人公「ハンダラ君」の経緯や少年として紛争を見つめる無力さと素朴な疑問の保持、一見難解な風刺の政治的な意味をひとつひとつ説明することによって、現地の人々が翻弄されている大きな力（国連やアメリカ合衆国、イスラエル）と対峙し、主体的で人間らしい気持ちや希望を堅持する姿を理解しようとした。

前国連事務総長のコフィ・アナン氏による「風刺漫画家には作品を通して激情を煽るのではなく対話を促す責任があること、また、読者を分断するのではなく教育する責任が伴っているという考えに基づいて活動している」としたCartooning for Peaceに関する文章を紹介し、絵画が社会的対話を形成する一役を担うことを議論した。

図3 表現が奪われ、そして命が奪われる（ナジ・アル・アリ作）



## F 刺繍と女性

伝統芸術の一つである刺繍作品集をもとに、多くの刺繍作品を実際に手に取って紹介した。また刺繍が施された民族服やその意味について考え、アイデンティティの問題について議論した。刺繍製品が造られる街として、ビリン村におけるデモとストリート・アート

が併せて紹介された。

非暴力かつアートで彩られたデモの様子で世界的に有名になったビリン村に関する芸術作品は多く、その一部から、昨今の街づくりアートの理論を重ねて解説した。また路上に設置された芸術作品によって、村の教員が逮捕された事例から、アートの持つ潜在的な力が議論された。

## G 写真

フォトリーグから発展した報道写真の経緯をふまえ、イスラエルを含む海外とのNPOや日本政府支援（難民キャンプ等への教育敵支援）における写真や目撃者としての立ち合い活動を概観した。NPOとして、Breaking the Silence等が公開する写真展の様子について紹介し、写真を媒介とした市民対話の現場を学んだ。写真の持つ報道性に加えて、感情的紐帯の形成について論じた。

## H 在外難民の芸術—文学・詩と音楽のコラボレーション

在外パレスチナ難民として活躍し世界的に高く評価されているエドワード・サイードの著作、ガッサーン・カナファーニーの文学、そしてマフムード・ダルウィーシュの詩を紹介した。ガッサーン・カナファーニーによるパレスチナ芸術の解説を簡略に紹介しながら、文学による表現、文化的抵抗の意味について考えた。またヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国において演劇や音楽を用いた難民のアイデンティティ継承がなされていることについて、国連でのLe Trio Joubranの招待演奏をもとに、理解を深めた。

一連の授業の最後に、音楽と文学のコラボレーションとして、フランスで活躍するLe Trio Joubranとマフムード・ダルウィーシュが、伝統舞踊ダプカを継承するラマラの若者グループと共同で開いた、フランスでの記念コンサートの風景を鑑賞した。演奏で示される衣装、伝統的な楽曲と楽器、伝統舞踊、朗読される詩の意味、観客の呼応、創造的な意味というすべての要素について、学生たちは読み取ることができるようになっていた。こうした成果は、知識の導入だけでは越えられない理解の壁に直面していた学生たちを大きく勇気づけ、他者との対面と対話に関する新たな可能性の糸口を開いたと思われる。

### 6-2. 他者との出会いをうながす公共圏として

最終回のLe Trio Joubranとマフムード・ダルウィーシュのコラボレーション作品の鑑賞や、イスラエルにおける「Breaking the Silence」の写真展といった難度の高い複合的な作品については、とりわけ反響が高く、学生らは「もしこの一連の講義がなければ、国際ニュースはもとより、こうした芸術作品の意味を理解することなど絶望的に困難だった。」と語り、あるいは「占領政策や現状を批判するような作品は、すべてパレスチナ青年によるものだ

と画一的に誤解しただろう」とも述べていた。パレスチナ問題と定義されがちな問題に、意外にも国際的な人々の関与があるという発見も散見された。またある学生は、自分には偏見があったことを自覚するとともに、芸術を鑑賞する中で偏見が払しょくされたことが大きな収穫だと回答を寄せ、芸術を介した遠隔授業の中で、様々な出会いや変容が起きたことが観察された。

こうした回答群からは、芸術を基軸に遠く中東の紛争状態をなお平和への希望をもって生きる人々の「表現」を学生が受け取り、そこから決して画一的ではない「多様な声」を感じ取ることができたと思われる痕跡が多々見られた。オスロ合意の再解釈資料など、政治的な資料も一定程度共有したが、芸術を柱にしたことで、学生にとっては視覚的に理解しやすい講座となったと思われる。遠隔授業で教員と学生同士にはすでに距離があり、学ぶ内容もまた遠い中東の人々の伝わりにくい実情であり、さらに現地で隔てられた人々の断面という、重層的に「遠隔」が折り重なる様相の中で、そこでの多様性を肌身にしみる感覚で理解しようとした当講座において、芸術は一つの公共圏を確実に形成しようとしていた。それぞれの現場からアクセスする画面に映る、フランスのコンサートホールで舞い踊るラマラの民族舞踊の姿が、意味を持って立ち現れるとき、数値や用語に代替されえない多様な声が、芸術を媒介に可視化されたことを最も強く実感した瞬間でもあった。公共圏と親密圏の往還がどの程度達しえたかについて学習者の回答をもとに、より細かな分析を行いたいと考えている。

## 7. まとめ

縮小し互いに近くなったはずの国際社会ではあったが、観光や消費を除いた対面的な接触交流にはいまだ限界があり、コロナにおける現況は我々に改めて、遠い「他者」との出会いや交換の方法を多面的に追求するよう促してくる。「遠隔化」や「距離」という環境を受容したうえで、他者の理解に関する教育的営為を行わざるを得ないという状況として、以前から、直接対面が困難な状況や課題を多く含む紛争や平和構築といった分野では直接対話に代替する多様な対話ツールが模索されてきた。今回の教育における試みは、芸術を媒介としたものであるが、これは単に中東と日本を結ぶだけではなく、例えば東アジアの戦後和解などのような、日本と周辺諸国の市民的対話環境の整備においても十分に応用できるものになるのではないかと考え、萌芽的研究として追求しているところである。「芸術を媒介とした公共圏の創出」の可能性について、なお一層の研究の精緻化を行ってきたい。

謝辞 本研究はJSPS 科研費JP20K20686 挑戦的研究（萌芽）「芸術との対話を経た公共圏の形成過程に関する実証研究」2020-2022の助成を受けています。当該テーマは、日本科

学会第22回総合学術研究集会における分科会「公共圏における多声性—芸術が提供する知の交換」(D4分科会)にて着想され、深められました。また本小論で記述した南山大学の教育講座は、資料収集においては南山大学による留学措置「紛争地における芸術の地域間コミュニケーション機能に関する研究」(ベツレヘム大学・パレスチナ自治区)を受けました。記して感謝します。

## 参考文献

- アレント, ハンナ 1973『人間の条件』志水速雄訳 中央公論社.
- 石田雅樹 1998「政治の祝祭性・祝祭の政治性:ハンナ・アーレントと祝祭的なもの」『筑波法政』25, 103-123.
- 市川新 2005「演練1941:大日本帝国最後の政策研究ゲーミングとして」『第1回横幹連合コンファレンス予稿集』[https://www.jstage.jst.go.jp/article/oukan/2005/0/2005\\_0\\_155/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/oukan/2005/0/2005_0_155/_pdf/-char/ja)
- 遠藤泰生 2017「アメリカ近代史研究における公共性あるいは公共圏への関心と日本におけるその希薄」遠藤泰生編『近代アメリカの公共圏と市民』1-33. 東京大学出版会.
- 桶川泰 2011「親密性・親密圏をめぐる定義の検討:無定義用語としての親密性・親密圏の可能性」『鶴山論叢』11, 23-34.
- カナファーニー, ガッサーン 1974「占領下パレスチナにおける抵抗文学」奴田原陸明・高良留美子訳 野間宏編『現代アラブ文学選』創樹社340-392.
- 桑野隆 2008「ともに さまざまな 声をだす:対話的能動性と距離」『日本質的心理学会』7, 6-20.
- 齋藤純一 2008『政治と複数性:民主的な複数性に向けて』岩波書店.
- 大学コンソーシアム京都 2015「大学教育における対話の可能性」<https://www.consortium.or.jp/fd/10195>
- 田島充士 2014「異質さと向き合うためのダイアログ:バフチン論からのメッセージ」『心理学ワールド』(64), 9-12, 日本心理学会 <https://psych.or.jp/wp-content/uploads/2017/10/64-9-12.pdf>
- 佐々木陽子 2020「文化芸術を用いたパレスチナ第3次インティファダ:闘いの村ビリンが創造した公共圏と対話」『日本の科学者』55 (2), 5-14.
- 日本科学者会議 2018「第22回総合学術研究集会 分科会情報」『日本の科学者』53 (12) 付録 <https://consumernet.jp/wp-content/uploads/2018/12/JSA22sogaku4thCirc.pdf>
- ハーバマス, ユルゲン『公共性の構造転換』細谷貞雄訳 未来社.
- 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会 2014『図書館情報学用語辞典 第4版』
- バフチン, ミハイル 1995『ドストエフスキーの詩学』望月哲男、鈴木淳一訳 ちくま学術文庫, 筑摩書房.
- バフチン, ミハイル 2013『ドストエフスキーの創作の問題』桑野隆訳 平凡社ライブラリー, 平凡社.
- 肥後本芳男 2014「書評John L. Brooke, *Columbia Rising: Civil Life on the Upper Hudson from the Revolution to the Age of Jackson* (Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press, 2010)」『アメリカ太平洋研究』14, 161-176.
- 星野命・金沢吉展・大西守・井上孝代 1998「座談会 多文化時代のカウンセリング」『現代のエスプリ』377, 5-29.

森啓輔 2015「ポリフォニー」『現代美術用語辞典』ver. 2.0 <https://artscape.jp/artword/index.php/ポリフォニー>

森英樹 2003『市民的公共圏形成の可能性：比較憲法的研究をふまえて』日本評論社。

Brooke, John L. 2004 Consent, Civil Society, and the Public Sphere in the Age of Revolution and the Early American Republic in *Beyond the founders: new approaches to the political history of the early American republic* edited by Jeffrey L. Pasley, Andrew W. Robertson, and David Waldstreicher, University of North Carolina Press.

Naji al-Ali 2009 *A child in Palestine: the cartoons of Naji al-Ali*. Verso Books; New York/London.



# Palestine on Dialogue

## —Art as Polyphony in Public Sphere—

Yoko SASAKI

### Abstract

The author used Palestinian art to create a “public sphere” for cross-cultural contact in a distance-learning class. In this paper, an historical consideration of dialogue of “public sphere” was analyzed to understand how art-based education works to help visualize “the others” existence.

When art is appreciated, it brings about the formation of a place where a kind of other appears, that is, the "public sphere". Contact with the work of art creates emotional feelings, internal dialogue, or dialogue with other participants. The viewer finds information outside the “intimate sphere” in which the work of art was created and explanation of the work’s meaning depicted. As a result, not only informational exchange but also empathic and emotional exchange between the viewer and the work is achieved, which can be considered a space for a certain kind of dialogue. In this paper, the author used works of art as a space for cross-cultural contact to deepen the understanding of others. The theory of distance learning using works of art as a place to visually reveal the "other", visualize it as a non-convergent polyvoice, and form a "dialogue" with it, is explored.

**KeyWords** : Palestine, art, public sphere, postcolonialism, dialogue